

(別記様式)

令和7年度 学校運営改善シート

学校名	筑波大学附属聴覚特別支援学校	
	令和6年度	令和7年度
校長名	伊藤僚幸	伊藤僚幸
幼児・児童・生徒数 (5月1日現在)	185	176
学級数	33	31

学校教育目標	聴覚障害のある幼児児童生徒の心身の発達段階に応じた最も適切な方法で教育し、進んで自分の能力を開発し広い視野に立って文化的・生産的活動に寄与できる人間を育成する。
学校運営方針	(1) 幼児児童生徒の実態に配慮した学習指導、生活指導、進路指導等を充実させる。 (2) 筑波大学の教育・研究に協力する附属学校として聴覚障害教育を先導し、革新的かつ汎化可能な実践的研究に取り組み、その成果を発信する。 (3) 聴覚障害教育に係る研究会や研修会等の企画運営、研修生の受け入れや講師派遣等を行い聴覚障害教育の専門性の発展に貢献をする。 (4) 海外の聴覚障害教育関係機関との交流を通じて、グローバルな視野を育むとともに、児童生徒のコミュニケーション力の向上を図る。 (5) 医療機関や地域社会との関係を強化し、インクルーシブ教育に係る外部支援に積極的に取り組む。 (6) 教職員が誇りを持ち、効果的・効率的な働き方ができるような環境作りを推進する。
附属学校群の ミッション	Designing Education for an Inclusive and Global Society (インクルーシブでグローバルな社会を実現するための教育をデザインする) (1) 時代を切り拓く教育のデザインと革新的な教育実践の追求 (2) 多様性を尊重しインクルーシブな社会を実現する人材の育成 (3) グローバルな視野をもち持続可能な社会を実現する人材の育成 (4) パートナリシップによる未来の共創 (5) ウェルビーイングの向上と安全・安心・快適な環境の創出

(別記様式)

学校名	筑波大学附属聴覚特別支援学校
-----	----------------

【達成度】	IV・・・「目標を上回って実施している」
	III・・・「目標を十分に実施している」
	II・・・「目標を十分に実施していない」
	I・・・「目標を実施していない」

分野	重点目標	具体的方策	自己評価		学校関係者評価	
			重点目標に対する評価	達成度	課題と改善策 学校関係者からの意見・要望・評価等	
教育課程・学習指導	<ul style="list-style-type: none"> 学習指導要領等をふまえた教育課程及び指導の改善に努める。 幼児児童生徒の発達段階や障害の状態等をふまえ、実態に配慮した個別最適な学習指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児児童生徒の実態や特性等に配慮し、準ずる教育を実践する。授業研究会のみならず、通常の授業においてもPDCAサイクルを意識し、授業改善に努める。 ICTを積極的に活用し、視覚的な情報を有効に提示することにより、幼児児童生徒に興味・関心を持たせ、主体的・対話的で深い学びに結びつく学習を展開する。また、習熟度に応じた指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部において講師招聘等教員研修会や授業研究会を実施し、指導技術の向上を図ることができた。本校主催の研究会や公開授業の際、本校教員も互いに授業を参観するなど研鑽に努めることができた。 タブレット端末等を用いる際、発達段階や個々のコミュニケーション力を考慮した。視覚的な情報を思考力育成に結びつける指導を行うことができた。高等部普通科の理科の授業が、文部科学省 (StuX Style) 好事例に採用される等、教育活動を発信することができた。 	III	<ul style="list-style-type: none"> 各学部の研究テーマに基づき、それぞれの教員が研究や実践に取り組んでいる。研究等の達成度や評価を確認する場が、各学部内での研究授業や全日本豊教育研究大会等での発表に偏る傾向にある。一貫教育のメリットを再確認する上でも、学校全体で学び合える機会を増やす。 それぞれ教職員は、所属する学部を越え、他学部の好事例を自身の授業改善に生かす姿勢が必要である。好事例等、短時間で紹介し協議できる校内セミナーの場を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害教育に係る有用な指導を今後も継続して行ってほしい。 聴覚障害のある幼児児童生徒への指導の工夫や改善を学校全体で共有してほしい。 タブレットや大きな画面等を使い、見て分かりやすく興味を持てる授業をしている。 教員がとても努力しており感謝している。子供がのびのびと学んでいる。 個人差に応じた情報保障に努めてほしい。 時代に合わせた教育の充実で感謝してほしい。 将来を見据えた他学部の情報を知りたい。
進路指導・生徒指導	<ul style="list-style-type: none"> 幼児児童生徒の学習の実態を適正に把握するとともに、幼児児童生徒及び保護者の希望を尊重した進路指導に努める。 学校、家庭、関係機関が連携して、幼児児童生徒が互いに相手を尊重し、安心して学習できるように生活上の課題に係る相談、支援を丁寧に行い、適切に指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児児童生徒の学習成果や適性に応じた教育課程を設定するとともに、幼児児童生徒や保護者からの希望を丁寧に聞き取り、進学や就労支援に努める。 学校いじめ防止基本方針に基づき、各学部学科において月に2回、幼児児童生徒のいじめに関する情報共有会議を行い、運営委員会において管理職及び各学部学科主事主任が、その情報共有する。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門家と適宜連携を取りながら組織として課題に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 個別面談を丁寧に行い、個別的教育支援計画を作成し指導することができた。幼児児童生徒の実態及び保護者の希望を尊重し、適切な就学・就職につなげることができた。 「学校いじめ防止基本方針」に基づき、各学部学科で生じた事案に対し即時に対応した。保護者やスクールカウンセラーと連携し、適切な指導及び支援につなげることができた。附属学校教育局の指導・助言を受け組織的な対応ができた。 	IV	<ul style="list-style-type: none"> 保護者の思いに寄り添い、多様な進路に向けた指導・支援するための適切な伝え方について整理する必要がある。担任が主事主任等に相談し指導助言を受けやすくするように管理職から主事主任に各学部での環境調整を指示する。 情報収集の即時性が課題である。小さなサインを見逃さない意識の向上を教員にさらに持たせる必要がある。各学部会及び職員会議等で具体的な例を挙げて管理職から継続的に指示をする。いじめ防止研修を計画的に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの進路が決まっており良い。 子供の希望や保護者の思いを大切にした進路指導をしていて良い。 学校としていじめ防止対策が出来ており良い。 学校・家庭・関係機関が連携して、子供が安心して過ごせる環境がつけられている。 就職に向けてセルフアドボカシー教育はできているか。 教員が熱意を持って指導している。 子供の友人関係や生活面で成長を感じる。
保健管理・安全管理	<ul style="list-style-type: none"> 保健行事や関連する指導を適正に行い、児童生徒の自己健康管理能力の向上を図る。 防災防犯意識の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒等がスクールカウンセラーを身近に感じ、カウンセリングを受けやすくなるため、スクールカウンセラーの授業参観など児童生徒との接点を多くする場面を設ける。 防災防犯訓練の実施及び危機管理マニュアル等の見直しをし、実地的な対応ができるよう改善する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学部において、幼児児童生徒の実態に合わせた保健に関する講演会を実施することができた。 管理職は、スクールカウンセラーや関係教職員との連絡を定期的に行い、配慮を要する児童生徒等についての情報共有と対応について協議することができた。児童生徒とスクールカウンセラーの面談を計画的に実施することができた。 防災防犯訓練を計画的に行い、その都度マニュアルを見直した。火災発生場所によって避難場所を適宜変更するなど、実地的な対応を意識づける訓練をすることができた。 	III	<ul style="list-style-type: none"> スクールカウンセラーに相談できる意識づけを一層進める必要がある。 スクールカウンセラーが対応できる時間が限られている。有効な時間設定について、実績に基づき検討し改善する。 寄宿舎の防災訓練は、早朝を含め複数回行っている。高等部普通科は、防災意識を高める上で防災宿泊学習を実施した。他学部においても同様の行事を企画し取り組ませたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 防災・防犯の実地的な対応を明確にする。 スクールカウンセラーが十分に機能していると思うが、気軽に相談できているかの情報がほしい。 施設設備の改善（空調、水回り、トイレ、熱中症対策用テント等）をしてほしい。
組織運営	<ul style="list-style-type: none"> 校長のリーダーシップにより、校務分掌を効果的・効率的に機能させ、学校運営を円滑に進める。 より一層働きやすい環境を目指すため、教職員全体のウェルビーイングの意識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 運営委員会を通して各学部主事主任等との情報共有、連絡調整を行い、全教職員に周知する。 1年単位の变形労働時間制を有効に運用し、研修を奨励するなど教職員が自己研鑽を積み、仕事にやりがいを持って勤務できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 運営委員会及び職員会議等を通して、校長の指示を各学部に伝え、学校運営を円滑に進めることができた。 教職員の多くが本校での業務に誇りとやりがいをもって勤務している。悉皆研修の受講についても適切に行っている。さらに積極的に自己研鑽研修を行っている教員も多い。 教育実践研究を奨励し、助成金事業に挑戦し、採用された教員が複数名いる。 産業医、附属学校教育局と連携し、空調修繕、危険樹木伐採等環境整備を行った。 	III	<ul style="list-style-type: none"> 情報インシデント等の事態に即時的に対応できた。未然防止について、複数回注意喚起を行った経緯がある。教職員への伝達については、自分事としてとらえることを強調し周知を徹底したい。 教育実践や研究については、多くの教職員が自信を持って取り組むことができるよう管理職及び研究主任が助言、奨励する。 環境整備の優先順位を幼児児童生徒の教育環境に係る改善の緊急性や樹木医師票における危険性に基づき、適正に判断し、予算を執行する。 	<ul style="list-style-type: none"> 校長を中心に学校の運営がスムーズに行われている。 学校運営についての情報共有や教職員の指導技術を含めた業務のノウハウをもっと共有する。 保護者と学校との対話等を通して、円滑なコミュニケーションをとることに努めてほしい。
その他	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害の早期教育の充実を推進し、筑波大学の附属学校として社会的ニーズに貢献する。 インクルーシブ教育に係る外部支援を強化する。 	<ul style="list-style-type: none"> 医療、福祉、地域の教育機関等と連携して、難聴児の切れ目ない支援体制の窓口となる。 近隣の教育委員会等と連携して、聴覚障害児及び保護者、教育機関等への支援体制の一翼を担う。 	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害乳幼児教育相談66名（年間約2,500件）、補聴相談31名を含め、多くの相談者に対応した。筑波大学の附属学校として、研究協力や教育実践の公開及び研修会を実施するなどし、地域及び全国の聴覚障害関係機関等の研究・研修に貢献した。 近隣の教育委員会等と連携して、インクルーシブ教育に係る外部支援（11件）を実施した。 	IV	<ul style="list-style-type: none"> 早期に聴覚障害が発見された乳幼児とその保護者に対する支援や、通常の学級にいる聴覚障害の子供たちへの支援を行うために、本校の教育活動をこれまで以上に周知する必要がある。行政、教育機関との情報共有を更に進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 医療・福祉・教育機関や地域と連携して子供や保護者を支援している。今後も大切にしてほしい。 本校に期待する社会的ニーズを明確にする。 インクルーシブ教育に積極的に関与してほしい。 教員や児童生徒等が地域の活動に参加するなどコミュニケーションをよくとっている。地域清掃などの社会貢献活動をしていて良い。国際交流をし、グローバルな生徒に育ちとても良い。